

Title	キケロー『ブルトゥス』試訳 (I) : §1 ~ §24
Sub Title	Cicero, Brutus 1-24 : a Japanese translation with a short introduction & notes
Author	小池, 和子(Koike, Wako)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.51 (2020. 3) ,p.217- 231
JaLC DOI	10.14991/005.00000051-0217
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000051-0217">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000051-0217</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# キケロー『ブルートゥス』試訳 (I) : §1～§24

小池和子

## (1) はじめに

以下では、マルクス・トゥッリウス・キケローの最晩年の作品の一つ『ブルートゥス』§1～§24の訳出を試みる（残りの部分は次号以下で順次取り扱う）。最初に、この作品についてごく簡単に説明しておきたい。

### ① 主な内容、作品の形式と登場人物

この作品は、一言で言うとローマの弁論の歴史を、それぞれの時代に活動した弁論家たちの事績を語ることによって綴ったものである。前書き、導入部 (§1～§24) を経て、最初に少しだけ (§25～§51)、先駆者としてのギリシアの弁論家たちのことが語られる。その後で、本題であるローマの弁論家たちの話が始まる。まず名前が挙げられるのは、ローマの初代執政官（前五〇九年）の一人であり、半ば伝説上の存在であるルーキウス・ユニウス・ブルートゥスを筆頭に、当人たちの（ものとされる）事績から判断して、優れた知性の持ち主で、従って雄弁でもあったはずであるとキケローが推測する人々である。だが、確かな記録で裏付けが可能な最初の弁論家として彼があげるのは、マルクス・コルネーリウス・ケテグス（前二〇四年の執政官。§57以下）であり、このケテグスから、ローマの弁論家の歴史についての本格的な記述が開始されると言ってもよい。以下、基本的には年代順に、雄弁家として名を残した人々が取り上げられ、最後はキケロー自身と同時代の弁論家（但し原則として、対話当時の存命者は除外される）にまで至る。

その中には、キケロー自身の自伝的な記述も含まれている。キケローは、自分の時代までに弁論家として活動したあらゆる人々を取り上げることを表明しており<sup>1</sup>、作品中で名前の挙がる弁論家は、二百名以上におよぶ。これだけの大人数を整理するのに、キケローは世代 (aetas) による区分という方法を用いている。但しそれは年代を伴うような厳密なものではなく、「～と同時期に…も活動していた」、といったゆるやかなグループ分けによるものである。

キケローが作品中で取り上げる弁論家たちについて注目するのは、(すべての弁論家について、そのすべてが記されるわけではないが) 主として、彼らの弁論スタイル、彼らが弁論によって残した業績 (具体的な弁論作品が示されることも多い)、弁論以外に残した著作、彼らの教育や素養、人柄、興味深い逸話などである。これらの弁論家たちの弁論は、現在はすべて散逸している。とりわけ、古い時代の弁論家たちの多くは、そもそも一般的な情報も乏しい。そのため『ブルトウス』の記述は、彼らについての貴重な証言でもある。

作品は対話形式で記されており、対話者はキケロー自身、『アッティクス宛書簡集』の名宛人として知られるティトウス・ポンポニーニウス・アッティクス、後のカエサル暗殺者マルクス・ユニーウス・ブルトウスの三名で構成される。アッティクスとキケローの長年の関係は今更言うまでもないだろう。一方、ブルトウスとの親しい関係は、比較的遅く始まった。キケローの書簡集にブルトウスの名が頻繁に登場するようになり、彼との交流が顕在化するのには、前五一年も後半になってからである。しかも、その頃のキケローは、ブルトウスに対してあまり良い感情を抱いていなかった。ブルトウスはその頃、カッパドキアのアリオバルザネース三世やキュプロス島のサラミース市に貸してあった借金を取り立てようとしており、当時キリキア総督として赴任中だったキケローはその交渉に巻き込まれ、ブルトウスの強引な態度に少なからず辟易させられることがあった。ある書簡でキケ

---

1 cf. § 269: omnis enim commemoras, qui ausi aliquando sunt stantes loqui (アッティクスの台詞として表明される)。

ローは、彼が自分に対しては、たとえ何か依頼してくるときであっても、いつも横柄で、傲慢で、常識に欠ける言葉遣いで手紙を書いてくると不満をもらしている (*Att.* 6. 1. 7 *ad me autem, etiam cum rogat aliquid, contumaciter, adroganter, ἀκοινοvoήτως solet scribere*)。

この借金取り立ての一件のあと、ブルートゥスの名はしばらくの間キケローの書簡から姿を消す。前四八年のアッティクス宛書簡に「ブルートゥスは友人である」(*Att.* 11. 4a *Brutus amicus*) という短い言及が一度だけあり、その後は、ブルートゥスの動向を気にかける言葉が見られる前四七年末の書簡 (*Fam.* 15. 20. 3 *haec prima cupio cognoscere ... ubi Brutum nostrum videris*) まで再び途絶える。これらの短い言及からも多少はうかがわれるが、両者の関係は良好になり、深まっていったらしい。そしてこの『ブルートゥス』が書かれた前四六年(後述)の頃になると、キケローはブルートゥスと積極的に良好な関係を築こうとしており、それは特に学問的な交流の形で行われている。本作品でブルートゥスが対話者の一人となっていることはその一つのあらわれといえる。このほかキケローは、『弁論家』、『ストア派のパラドックス』、『善と悪の究極』といった作品をブルートゥスに宛てて記している。両者はまた書簡もやりとりしており、カエサル暗殺後に記されたものの一部が伝承されている(『ブルートゥス宛書簡集』)。

## ②作品内の時間と執筆時期<sup>2</sup>

本作品の場合、対話が行われたと設定されている時期と、作品の成立時期とがほぼ重なっている。まず対話の設定時期だが、作品中には、ヒントとなる記述が幾つかある。たとえば、対話者の一人ブルートゥスが前四七年の秋に行ったデーイオタロス王弁護についての言及 (§21) があることから、対話の時期は少なくともそれより後となる。それを念頭におくと、§10でキケローらが待っている情報とは、同じ前四七年の十二月末に始まったカエサルのアフリカ戦役(カエサルは十二月二八日にアフリカに上陸)の情報を意味

---

2 本項の記述は、Douglas (1966), ix sq.によるところが大きい。

するものと推測される。また、ブルトウスの叔父でもあるマルクス・ポルキウス・カトーは、そのアフリカ戦役の締めくくりとなる前四六年四月のタブソスの戦いの後に、ウティカで自殺しているが、対話中ではまだ存命として扱われている (§118, §119)。以上のことからすれば、対話は前四六年の早い時期に行われた設定であると考えることができる。

一方、作品自体の成立年代については、同時期のキケローによる別の著作『ストア派のパラドックス』(*Paradoxa Stoicorum*) にヒントがある。この作品の前書き部分において、『ブルトウス』が既に記された作品として言及されているのである。そしてこの前書き部分でも、カトーは存命として扱われている (*parad.* 2)。そうであれば、『ストア派のパラドックス』は、カトーの死がローマに伝わるよりも前に完成していたと考えられる。それはすなわち、『ブルトウス』の方も、カトーの死がローマに伝わる以前に完成していたことを示唆する。

ただし『ブルトウス』の中には、この執筆時期と矛盾する記述もある。すなわち、やはりタブソスで戦死したルーキウス・マンリウス・トルクァートゥスや、プーブリウス・コルネーリウス・レントゥルス・スピンテールが、既に亡き人々として、取り上げる対象となっているのである。この点についてDouglasは、キケローが『ブルトウス』をいったん完成させた後で、再度手を入れ、タブソスでの戦死者についての記述を補足した可能性を指摘する。そして、カトーについては修正を入れずにそのままにした、それは、キケローが既にカトーについては別個に『カトー』(同じく前四六年)を記す計画を立てていたためではないかと推測している。

キケローはこの前四六年に、『ブルトウス』、『ストア派のパラドックス』、『カトー』の他にも、『弁論家』や『マルケッルスのための感謝演説』などを発表した。そしてよく知られているように、前四五年二月に娘トゥッリアが死去した後、彼はひどく悲嘆し、哲学に心の慰めを見いだした。前四五年から前四四年にかけては、『トゥスクルム荘談義』、『善と悪の究極について』、『老年について』、『友情について』等々、極めて多くの著作を次々に執筆している。そして前四四年三月一五日のカエサル暗殺後は、久しぶりに

政治の表舞台に立つことになり、反アントーニウスの政治活動を展開する。一連の演説『ピリッピカ』はもちろんのこと、各地の軍事指揮官らにも書簡で積極的な働きかけを行っていくようになる。『ブルトウス』については、改めて推敲を加える時間も、また気持ちも余りなかったとしても不思議ではない。

キケローは内戦では深い挫折を味わった。長期にわたる逡巡の末、いったんはポンペイウス・門閥派に与したものの、再び離脱し、カエサルへの恩赦を得た（なお、途中で離脱したのはブルトウスも同じである）。『ブルトウス』執筆時点で、内戦はまだ続いてはいるが、彼が支持した（そして見捨てた）大義の敗色は明らかである。かたやカエサルは連続して執政官や独裁官の地位を獲得し、独裁的な権限を強める一方である。こうしたキケローにとって憂鬱な状況を反映した文言は今回の訳出箇所にも認められるが、作品のそこかしこにも見出されるものであり、この作品はそういう背景のもとに記されたものとして読む必要がある。

### ③テキストについて

本作品には、最後の§333の後にいくらかの欠損があることを含め、写本伝承上の問題が少なからず存在する。イタリアのローディで一五世紀に発見された写本（codex Laudnsis, 通称L写本）が、古代から本作品を伝える唯一の写本であったが、この写本は発見後まもなく姿を消した。現存する写本はいずれもこの写本の系統を引くものであるが、そもそももとのL写本自体が、多くの間違いを含むものであったらしい（キケロー自身の推敲が十分に行われなかったことが影響している可能性もある）。

そのため、多くの箇所で修正が試みられてきたものの、必ずしも全てが解決されたわけではない。以下の訳文は、現在一般に標準的なテキストとして用いられているMalcovatiによるトイブナー版（後掲）を底本としている。

## (2) 『ブルートゥス』 §1 ~ §24

1. キリキア<sup>3</sup>から帰国する途上でロドスを訪れたところ、そこでクイーントゥス・ホルテーンシウス死去<sup>4</sup>の報を伝えられた。そのとき私は、皆の予想に反して<sup>5</sup>大きな悲しみを感じた。というのも、一つには、この友人を失ったことで、自分が喜ばしい交友関係と、多くの縁故をなくしたと思ったからである。かつまた、かくも優れた鳥ト官の死去により、我らが同僚団<sup>6</sup>の威信が減じたことを悲しく思ったからでもある。そのことに思いを馳せる中で、私は思い出していた。私は彼の手で、その同僚団へと選任されたのであったということ<sup>7</sup>。そこで彼は、宣誓をして私の威信の判定をしてくれたのである。また、その同じ彼の手で鳥トを受けて着任したのであったということも。したがって、鳥ト官の習わしにより、彼は私にとって親として敬うべき人であった。2. さらに心痛を増幅させたのは、賢明な市民やよき市民たちが著しく少なくなっているという時期に、この優れた、あらゆる方針を共有して私ときわめて親しい関係にあった人が、国家にとってきわめて折りの悪い時<sup>8</sup>に亡くなり、彼の権威と思慮深さへの追慕を私たちに残していったということである。また私は、大方の人々が考えていたのとは違って、私の賞賛に対する対抗者や中傷者を失ったわけではなく、むしろ、榮譽に満ちた仕事<sup>9</sup>の盟友であり仲間である人を失ったのであり、それゆえに悲しんでい

3 属州キリキア。キケローは前五一年～五〇年にかけて総督をつとめた。

4 キケローは前五〇年六月に彼の死を知る (*Att.* 6, 6, 2)。

5 注11を参照。

6 すなわち、鳥ト官の。キケローは、小クラッススのパルティア戦争での戦死を受けた欠員補充により、鳥ト官になった (前五三年)。

7 元来は、一人の鳥ト官が候補者を指名し、同僚団全体で選任するという形が取られていた。しかしこの時には、二人の鳥ト官が指名を行い、その候補者全員 (おそらく三人) が民会での選挙にかけられた。従って実際には、ホルテーンシウスが直接キケローを選任したわけではない。

8 カエサルと門閥派・ポンペイユスとの対立が激しくなり、内戦へと向かって行く時期。

9 弁論のこと。

たのである。3. 実に、より軽やかな部類の学芸<sup>10</sup>においても、名高い詩人たちが同輩の詩人たちの死を嘆いたということが記憶に伝えられている。ならば、この私は、いったいどのような気持ちで彼の死を受け止めねばならなかったろうか——無敵の存在となるより、彼の競合相手となることの方が名誉であった、そういう人の死を。とりわけ、彼の経歴を私が妨害することも、私の経歴を彼が妨害することも決してなかっただけでなく、逆に、意見を交わし、助言し、味方することによって、いつも一方が他方に助けられてもいたのであるから<sup>11</sup>。4. しかしあの方は、何かずっと幸運に恵まれていた人だった。この世を去ったのも、同胞市民たちにとってよりも、彼本人にとって好適な時であった。生きていたところで、国家を助けるよりも国家のことを嘆く方が容易な時に亡くなったのであり、彼が生きた期間は、この国で立派に、かつ幸福に生きることが許された時代だった。だから、もし嘆かねばならないのであれば、我々自身が被った不幸と損失ゆえに嘆くことにしよう。だが彼の死の折りの良さのことは、悲しく思うよりも良かったと思うことにしよう。この上なく輝かしく幸福なこの人のことを考えるたびごとに、私たちが愛しているのは、彼のことによりもむしろ自分たち自身のことなのだと思われぬように。5. というのも、もし、彼との交流を享受することがもはや私たちには許されていないことを嘆くのであれば、それは私たち自身の不幸を嘆いているのであるから。そのような不幸には、節度を持って耐えることにしよう。友情ではなくて個人的な利益に照らして考えていると思われぬために。一方で、もし私たちが、彼本人に何かつらいことが起きたかのように苦悩するのであれば、私たちは彼のこの上ない幸運を考えるのに、喜ばしく思う気持ちが足りていないことになる。

---

10 韻文作品を指す。

11 ここで語られるホルテーンシウスとの関係は少々美化されている。例えば前五八年にキケローが亡命に追い込まれた際、キケローはホルテーンシウスの貢献が十分ではないと感じていた。とりわけ亡命中にアッティクスに宛てたある書簡 (*Att.* 3, 9, 2) では、自分が亡命に追い込まれたのは彼の差し金であり罾であると言う。さらにそのすぐ後で、自分を滅ぼしたのは敵ではなく、自分に嫉妬した者たちだとも言っている。

6. 実に、もしクイーントゥス・ホルテーンシウスが生きていたなら、おそらく彼は他のことについては、残りの勇敢なよき市民たちと一緒にその喪失を惜しんだことであろうが、次の一点に限っては、他の人々に抜きんでて彼が悲しんだか、あるいはわずかの<sup>フォルム</sup>の人々だけと共に悲しんだかであろう。すなわち、ローマ人民の<sup>フォルム</sup>の広場が、あたかも彼の天分にとっての劇場であったかのようなそれが、ローマの耳にもギリシアの耳にもふさわしい洗練された声を奪われ、孤独になったのを彼が見たなら。7. 私自身としては、国家が方策の武器も、知性の武器も、権威の武器<sup>12</sup>も必要としていないことを心に苦悩している。それは私が扱うことを学び、それに親しくなじんだ武器、国政において傑出した者にふさわしいと同時に、まっとうな慣例を持ち、まっとうに組成された共同体にもふさわしい武器だった。もし国家に、一人のよき市民の権威ある弁論が、怒りに駆られた市民たちの手から武具を奪い取ることのできる時が存在したとすれば、それはまさに、人々の迷妄か、あるいは恐れが、平和を支持することを排除してしまった、あの時であった<sup>13</sup>。8. こういうわけで、ほかならぬ私自身も、大いに嘆くべきことは他にも数多くあるけれども、とりわけ次のようなことを嘆くことになった。つまり、この年齢になって、輝かしい業績を成し遂げてあたかも港へと——怠惰や不活発のそれではなく、慎み深く高潔な閑暇のそれである——退避する権利を得たという時に、かつ、今や私の弁論も既に灰色味を帯び、何か成熟し、いわば老齢に至っているという時に、武具が手に取られてしまった<sup>14</sup>ということ。使う<sup>15</sup> 当人たちはそれを立派に用いることは学んでいるものの、いかに健全に用

---

12 弁論術を指す。

13 内戦の開始のときこそ、弁論でそれを押しとどめることができた絶好の機会のはずであったのに、平和を支持する意見は押せられてしまった、の意。なお、当時のケクロウが自ら積極的に、平和のために活動していたわけではない。キリキア総督としての業績で凱旋式を挙行する機会を狙っていた彼は、ローマ市外で待機しており、前五〇年の元老院における議論にも加わっていない。前四九年一月の開戦後も、平和交渉の可能性を期待はするが、自分では特に何もしなかった。

14 内戦の開始（前四九年一月）を指す。

15 カエサルとポンペイユスを指す。

いるかは見出していなかった。9. だから、権威や業績についての榮譽を享受するだけでなく、賢明であるとの称賛も享受することができた人たち<sup>16</sup>は、他の共同体においてもそうではあるが、とりわけ私たちの共同体にあっては、幸運かつ幸福に人生を送ったと私には思えるのである。彼らのことを追憶し思い出すことは、極めて大きく極めて深刻な心痛を抱える中ではあるが、確かに心地よいものだった。最近私は、たまたまとある会話から、そのような追憶へと至ったのである。

10. というのも、私が小道を散策し、家で暇にしていた時、常の通りにマルクス・ブルトウスがティトゥス・ポンポニウスと一緒に私のところにやってきたのである。彼らは彼ら同士の間でも親しい関係だが、私にとっても非常に愛しく喜ばしい存在で、彼らの姿を見ると、私を悩ませていた国家についての心労が全て取まってしまうほどなのだった。彼らに挨拶したあと、私は言った——「ブルトウスにアッティクス、とうとう何か新しい知らせ<sup>17</sup>が来たかね？」。

「まったく何も」とブルトウスが言った。「あなたが聞きたいと思うことや、確実なこととして私が話す気になれることは何もありません」。

11. そこにアッティクスが言う。「国家については沈黙するために、君に何か心痛を与えるよりむしろ君から何か話を聞くために、私たちは君のところに来たのさ」。

「アッティクスよ、本当に君たちは」と私。「私が君たちのそばにいるときも不安を和らげてくれているが、そばにいない時にも、大きな慰めを与えてくれたね。君たちの作品<sup>18</sup>をもらって初めて私は蘇生し、昔の情熱へと立ち

---

16 過去の弁論家たちを指す。

17 (1) の②を参照。

18 原文は *litteris*。以下、§15にかけて、ブルトウスとアッティクスがキケローに送ったこれらの“*litterae*”についての感想が語られるが、ブルトウスのそれは、彼の著作として他にも言及のある *De virtute* に同定され、アッティクスのそれは、*Liber annalis* (ネポースの証言によれば、年表的にローマの歴史を整理したもので、その年に成立した法、戦争、その他の重要な歴史的出来事が網羅されていたのみならず、名家の系譜についても記されていたという。Nep. *Att.* 18.2) に同定

戻ったのだから」。

すると彼は言った。「ブルートゥスがアジアから君にあてて書いた作品を、私はとても喜んで読んだよ。私には、彼はその作品で、君に賢明に忠告を与えると共に、ごく親身に慰めの言葉をかけていると思われた」。

12. 「その通りだ」と私。「その作品で私は、長期にわたる全般的な体調の乱れから、たとえて言うなら日の光を見ることへと呼び戻されたのだ。それに、ちょうどあのカンネーの災厄の後で初めて、ノーラでのマールケッルス  
の戦いのおかげでローマ人民が立ち上がり、その後は成功が次から次へと数多く続いたのと同じように、私個人の事情に、また社会一般に生じた極めて深刻な不幸の後、ブルートゥスの作品をもらうまでは、私にはしたいと思うことは何一つなかったし、あるいは幾ばくかでも私の不安を和らげてくれるようなことも何一つなかったのだ<sup>19</sup>」。

13. するとブルートゥスが言う。「私は確かにそういうことをしたいと思ったのですし、もしこれほどの事態の中で、したいと思ったことを成し遂げることができたのであれば、大きな成果を得ることになります。だがところで、あなたを喜ばせたアッティクスの作品がどういうものだったのか知りたいのですが」。

「その作品はね」と私。「ブルートゥスよ、私に喜びを与えてくれただけではなく、期待するところ、健康ももたらしてくれたのだ」。

「健康もですって？」と彼。「それほど素晴らしい作品とは、いったいどのような類いのものでしょうか」。

「私にとって」と私。「あの作品の献辞よりも喜ばしかったり、あるいは今の時期になかったものがあり得ただろうか。彼はその作品で私に呼びかけ、

---

されている。いずれも現存しない。

19 内戦下の不安な状況全般を言うと共に、(1)の②でも少し触れたキケロー自身の個人的な事情にも触れている。キケローは前四八年十月にイタリアに戻り、カエサルと面会して恩赦を得た。しかしこの頃キケローは、弟のクィントゥスと不和になっており、クィントゥスは息子と共に、カエサルに向かって兄のことをひどく中傷した。カエサルはそれに動かされることはなかったが、この問題は、キケローの心痛と心労をいっそう増やした。

あたかも打ち倒れたようであった私を目覚めさせたのだ」。

14. すると彼は「それはもちろんあの作品のことをおっしゃっているのですね」と言う。「この人が、歴史の全体を簡潔に、そして私に思われたところでは、非常に綿密に扱われた、あれですね」。

「まさにその本が」と私。「ブルトウスよ、私には健康のためになったと言うんだ」。

するとアッティクスが言う。「君が言ってくれることは、私にはとても嬉しいことであるのは確かだが、結局のところその本の何が、君にとって新しかったり、あるいはそれほど有用となり得たのかね？」。

15. 「実にあの本は」と私。「多くの新しいことも、また私が求めていた便利さももたらしてくれた。つまり、時間的な順序が明らかになることで、すべてを一望のもとにできる、という便利さだ。それらを熱中して検討し始めたところ、その作品の検討それ自体が、私に健康を与えてくれるとともに、ポンポーニウスよ、こう思い出させました。私は、何か自分を蘇らせるとともに、それに対して君にお礼をする——同等ではないにしても、心地よい贈り物で——ためのものを、他ならぬ君からもらっているのだと。もっとも、学識ある人たちは、もらったのと同じ量で返すか、できればさらに上乘せして返すよう命じている、かのヘーシオドスの詩行<sup>20</sup>を称賛するのだけでも。16. ただ私は、気持ちとしては君に報いようとしているものの、具体的な形でそうすることはまだできないと思われる。それは勘弁してくれるようお願いする。というのも、私がもらったものに対して君にお返しをするのは、農夫たちがそうするように新しい収穫からでもなければ——それほどまでにすべての実りは妨げられ、花はむしり取られ、かつての豊かさを渴望して枯れてしまった——貯蔵物からでもない。それらは今は暗闇の中に無為に横たわり、そこへ至るあらゆる道は、かつてはほとんど唯一私だけに開かれていたのだが、今は私の前に閉ざされてしまっている<sup>21</sup>。そこで私は、いわ

---

20 Hes. *op.* 349f.

21 キケローが何らかの作品に着手し、しかし今はそれを続けられない、あるいは公表できないことを言っていると考えられる。

ば未耕作の、放置された土地に何かを蒔くことにしよう。それを真面目に育てて、君の贈り物の気前の良さに対して、利子も上乘せできるようにしよう。ただ、私の頭に、畑と同じことができればだが——長い年月休息すると、より豊かな実りを生み出すのが常である畑と同じことが」。

17. すると彼が言う。「私は君が約束してくれたようなものを本当に待ち望んでいる。とはいえ、君にとって都合が良いのでない限り無理強いすることはない。だが約束を果たしてくれたら、とても嬉しく思うだろう」。

「あなたがアッティクスに約束なさったようなものは」とブルトゥスが言う。「私も待ち望まねばなりません。もっともおそらく私は、自発的にこの人の代理人となって、貸した当人は相手の都合が悪いのに無理に取ることはしないと知っているものを、あなたに請求するでしょうが」。

18. 「だがブルトゥスよ」と私。「もともとの債権者はその名目ではそれ以上請求しないということをあらかじめ君から保証してもらわない限り、私は君に支払うつもりはないよ」。

「いえ全く」と彼。「敢えてそんなことをあなたに保証しようとは思いません。というのも、今は否定しているこの方が熱心な請求者になるであろうと、なるほどあなたにとって不愉快ではないものの、絶え間なくかつ厳しく請求するだろうと私は見ているからです」。

するとポンポーニウスが言う。「本当に私も、ブルトゥスは何も間違ったことは言っていないと思う。というのも、今や私も、君に敢えて呼びかけてみる気になっているようだ。長い時を経て初めて、君が少し元気になったのに気づいたからだ。19. そういうわけで、この人が君の私への借財を自分が請求しようと宣言してくれたので、君がこの人に借りているものについては、私が請求することにしよう」。

「それはいったい何かね」と私は言う。

「何かを書く、ということさ」と彼。「というのも、もう大分長いこと、君の書き物は沈黙してしまっているのだから。国家についてのあの書物<sup>22</sup>を出

---

22 『国家について』（前五一年刊）のこと。

してからというもの、我々は君から何一つ与えてもらっていない。私自身もあの本によって、我々の歴史の把握へと促され、焚きつけられた。だが書物については、君のできる時で。かつ、君のできるがままの形で、と願います」と彼は言った——20。「今は、もし心にゆとりがあるのなら、私たちが頼むものを話してくれたまえ」。

「いったいそれは何かね」と私は訊ねる。

「最近トウスクルムで君が私に話し始めた、弁論家についての話さ。彼らはいつから存在し始めたのか、また、誰がいて、それはどのような人たちだったのか、という。その時の会話を君の、というよりむしろ我ががブルートゥスに伝えたところ、この人は、自分も是非とも聞きたいと言ったのだ。そこで今日のこの日を私たちは選んだ。君が暇だと知っていたのでね。そういう訳だから、もし君に都合がよいなら、あのとき語り始めた話を、ブルートゥスと私の二人に語ってくれたまえ」。

21。「わかった」と私。「もしできるようなら、君たちの満足のいくようにしよう」。

「できるさ」と彼は言った。「ただ少し心を楽しむか、あるいは、できればだが、心を自由にしたまえ」。

「それでは、ポンポーニウスよ。あのとき話が始まったのは、誠実きわまりない最良の王であるデーイオタロスの主張を、ブルートゥスが美麗かつ言葉豊かに弁護した<sup>23</sup>と聞いたことに私が触れたことからだったね」。

「その通りだ」と彼。「それを皮切りに話が引き出されて、君はブルートゥスのために悲しんで裁判と広場の荒廃ぶりを悼んで泣くがごとくだったね」。

22。「確かにそうだったし」と私。「今もしばしばそうだ。なぜならブルートゥスよ、君のことは見ると、しばしば私の心には、君の素晴らしい素質と、とことん追求された学識、並ぶもののない刻苦勉励が、いったいいつか

---

23 前四七年。ガラティアの四分王デーイオタロスは、内戦でポンペイウスを支持したが、パルサーロスの戦い（前四八年）の後にはカエサルに恭順の意を示した。しかしカエサルは（ここで言及されているブルートゥスの熱弁も空しく）彼の領土の一部を取り上げた。

何かの経歴を持つことになるのかという懸念が浮かぶのだ。君が重大な案件に関わり、私のような年の者は既に君に地位を譲り、儀仗を引き渡していた<sup>24</sup>とき、突如としてこの国では、他のものが倒れるのと共に、これから我々が論じ始める雄弁そのものも口を閉ざしてしまったのだから」。

23. すると彼は言う。「それら他のもののためには、あなたのおっしゃるように悲しく思いますし、また悲しく思うべきであるとも思います。ですが弁論については、その成果や栄誉よりも、むしろ研鑽し訓練を積むことそのものが、私には喜びなのです。いかなるものも、そうした喜びを私から奪うことはないでしょう、とりわけこれほど熱心で\*\*\*あなた [を?] \*\*\*<sup>25</sup>。正しく理解している人でなければ、誰もうまく話すことはできません。それゆえ、真の雄弁のために力を注ぐ人は、正しく知るために力を注いでいるのであり、人は極めて大きな戦争の中にあっても、平静な心でそのことから離れることはできないのです」。

24. 「ブルトウスよ、よく言った」と私。「それに、かつてこの国において極めて美しい状態であったその他のものについては、自分には獲得できないと思ったり、あるいは獲得していないと思うほどに卑小な者は存在しない<sup>26</sup>がゆえにいっそう、弁論において君が得ている称賛を喜ばしく思う。戦争に勝利して雄弁になった人など見たことがない。だが、もっと話がしやすいように、よければ座って話そう」。

彼らもその考えが気に入ったので、私たちはプラトーンの彫像のもとにある、小さな芝地に腰を下ろした。

---

24 一般的には、公職の地位を退くことを意味するが、ここでは弁論家として第一線を退くという意味で比喩的に用いられている。

25 テキストに何らかの欠落がある。

26 高位公職がふさわしくない者たちに与えられていることを暗に言う（カエサルは自分に貢献した者たちを大いに取り立て、執政官職や法務官職、属州総督の地位などを与えた）。しかし雄弁の力だけは、権力でどうなるものでもない（それゆえ、「戦争に勝利して雄弁になった人など見たことがない」となる）。

### 底本

Malcovati, E. M. *Tulli Ciceronis Scripta Quae Manserunt Omnia, Fasc. 4 Brutus, editio altera*, Leipzig, 1970.

### 注釈書

Douglas, A. E. *M. Tulli Ciceronis Brutus*, Oxford, 1966.

Piderit, K. W. & Friedrich, W. *Ciceros Brutus, für den Schulgebrauch*, Leipzig, 1889.

Jahn, O.- Kroll, W. - Kytzler, B. *Cicero, Brutus*, Berlin, 1962.

### その他の参考文献

Hendrickson, G.L. *Cicero, Brutus*, Cambridge, Loeb Classical Library, 1962.

Shackleton-Bailey, D.R. *Cicero's letters to Atticus, Vol. III*, Cambridge, 1968

——— *Cicero: Epistulae ad Familiares, Vol. II 47-43 B.C.*, Cambridge, 1977.

——— *Cicero: Epistulae ad Quintum fratrem et M. Brutum*, Cambridge, 1980.

Sumner G.V. *The Orators in Cicero's Brutus: Prosopography and Chronology*, Toronto, University of Toronto Press, 1973.